

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第5回街づくり・持続可能性委員会議事録

1 日時

平成28年11月15日火曜日 15時30分～16時45分

2 場所

虎ノ門ヒルズ森タワー9階 TOKYO

3 出席者

委員

小宮山宏委員長、秋山哲男委員、枝廣淳子委員、崎田裕子委員、田中暢子委員、藤野純一委員、間野義之委員、マリ・クリスティーン委員、横張真委員、吉田正人委員、南明紀子様（小西委員代理） 計11名

臨時委員

勝野美江内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局参事官（臨時委員代理）、小坂勉東京都オリンピック・パラリンピック準備局総合調整部計画担当課長（臨時委員代理） 計2名

事務局

安井順一参与

武藤事務総長、佐藤副事務総長、古宮副事務総長、中村企画財務局長、井上大会準備運営第一局長、西中大会準備運営第一局次長、佐々木アクション&レガシー担当部長、田中持続可能性部長、小野スポークスパーソン 計9名

4 議事次第

- (1) 持続可能性に配慮した運営計画第一版(案)について
- (2) 東京2020参画プログラムの進捗状況について
- (3) リサイクル金属を活用した入賞メダルの制作について

5 議事録

武藤事務総長

皆さん、本日は御多用のところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ただいまから、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会第5回街づくり・持続可能性委員会を開催いたします。

冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会事務総長の武藤敏郎でございます。よろしくお願いたします。

それでは、まず開会に当たりまして、本委員会委員長の株式会社三菱総合研究所理事長並びに元東京大学総長、小宮山宏委員長から、一言御挨拶をお願いいたします。

小宮山委員長

本日の委員会の目的は、来月IOCに提出する予定の持続可能性に配慮した運営計画の第一版の案について、皆様に御同意いただくこと、また、10月にスタートした東京2020参画プログラムの進捗状況などについて御議論をいただくことです。

前回の委員会では、東京2020参画プログラムの案について、どのようにして参加を募っていくのか御意見をいただいたわけですが、今日はそれらの進捗についてお聞かせいただきます。

リオ大会が9月に終了し、既に東京に注目が注がれております。我々は、東京2020は1964年のオリンピックと何が違うのかということとずっと議論してきました。1964年の東京大会は途上国のオリンピックであり、レガシーはさまざまなインフラが残ったことにありました。東京2020は先進国のオリンピックですから、21世紀はどういう社会かについて、日本がどう考えているのかを示すのが、大会のレガシーになるというのが皆様の御同意でした。

2020年に向けて、今後は細部の検討に入っていきます。細部は極めて重要ですが、大きな視点を忘れないことも極めて重要ですので、よくバランスをとって、委員の皆様には御意見をいただきたいと考えております。

我々の重要事項の半分でございますけれども、持続可能性の分野については、ディスカッショングループやワーキンググループで持続可能性の委員の皆様には御協力いただきながら、運営計画と調達コードの作成について、事務局で検討を重ねております。

本日は事務局から、運営計画第一版案を御説明いただくとともに、検討事項をより具体的な取組とするために、これまで委員会でも議論された都市鉱山の活用に関連し、エンゲージメントの観点も含めた入賞メダル制作についてもご説明いただきます。本件は何人も委員が御提案されて、ほとんどの方が賛成をされており、委員会としてもとても重要な事項と考えております。

先進国においては、人工物が飽和しております。これは極めて重要な視点です。自動車の保有台数は6,000万台、ビルの床面積もほとんど飽和しております。つまり、都市鉱山に必要な金属資源があるのが21世紀の特徴で、先進国は既にそうなっています。そうした意味で、メダルを廃棄物からつくるということではなく、都市鉱山の活用という概念が21世紀の社会において重要であるという象徴的なプロジェクトですので、是非、そうした大きな観点と、どのようにして都市鉱山から金属を集めるのかという具体的な計画とをバランスよく議論していただければと思います。

是非、本日も忌憚のない御意見を伺いたいと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。以上、私の挨拶とさせていただきます。

武藤事務総長

小宮山委員長、どうもありがとうございました。

本日は11名の委員の皆様と、臨時委員代理として、政府より勝野内閣官房参事官、東京都より小坂東京都オリンピック・パラリンピック準備局総合調整部計画担当課長、お二人に出席いただいております。

また、元東京都技監で組織委員会参与の安井順一様にも御出席をいただいておりますので、紹介させていただきます。

ここから先の議事の進行は、小宮山委員長にお願いいたします。

小宮山委員長

それでは、議事に進みます。本日の議題は、持続可能性ディスカッショングループの皆様にご協力をいただいている、「持続可能性に配慮した運営計画 第一版(最終案)」について、御報告をいただきます。

2点目に、本年10月からスタートしました東京2020参画プログラムの進捗状況について、事務局より御報告をいただきます。

最後に、これまで皆様にごいただいた御意見の具現化の一つであります、都市鉱山を活用した入賞メダルの制作について、組織委員会の方針を御報告いただきます。

では、早速ですが、「持続可能性に配慮した運営計画 第一版」について、事務局から御説明ください。

田中持続可能性部長

事務局のほうから、「持続可能性に配慮した運営計画 第一版」について御説明いたします。

先ほど小宮山委員長から御説明がありましたとおり、これまで、持続可能性のディスカッショングループや、各ワーキンググループで御議論いただきました「持続可能性に配慮した運営計画」の第一版がまとまりましたので、御報告いたします。

まず、簡単にこの運営計画の位置づけを御説明いたします。

運営計画は、東京2020大会を持続可能性に配慮した大会とするために、関係者のよりどころとなるものとして、持続可能な大会の準備・運営を行う上での考え方を示したものでございます。

組織委員会のほか、東京都、政府をはじめとするデリバリーパートナーは、本計画を尊重して、それぞれの役割に応じた取組を実施し、持続可能な大会の準備・運営に努めることといたしました。

資料2を御覧いただきたいと思います。運営計画のこれまでの策定過程を御説明いたします。おおよそ1年半前の2015年6月にこの委員会を設立いたしまして、委員会の附属組織として持続可能性ディスカッショングループ、さらには低炭素ワーキンググループ、資源管理ワーキンググループ、持続可能な調達ワーキンググループを設置いたしまして、委員の皆様にご議論をいただいております。今年初めには、「持続可能性に配慮した運営計画フレームワーク」を発表し、意見募集を実施いたしました。

そして、前回、7月の第4回街づくり・持続可能性委員会で、運営計画第一版の案について御議論いただき、その後すぐ、計画案についての意見募集を実施いたしました。本日は時間の都合上、寄せられた意見の一つひとつは説明いたしません、カーボンマネジメントに関する意見が多く寄せられました。後でまた簡単に御説明いたしますが、資料3がその一覧となっております。意見募集の結果を踏まえまして、ディスカッショングループ、ワーキンググループの先生方、東京都、関係省庁からさらに御意見をいただきまして、今回、最終案をとりまとめました。この後、主な修正点について御説明いたします。

本日の委員会の後のスケジュールでございますが、組織委員会内の経営会議、12月13日に理事会での審議を経て、12月中にI0Cに提出する予定でございます。その後、来年1月には、この第一版を発表していく予定でございます。

今回発表いたします第一版の内容は、気候変動や資源管理などの主要テーマごとに、理念や施策の方向性を中心に述べております。定量的な目標や具体的な活動を盛り込んだ第二版の計画は、2018年度中に策定・発表していく予定です。

続いて、資料3でございますが、先般8月1日から15日まで行った運営計画第一版の意見募集、パブリックコメントの御意見の一覧となっております。提案件数は37件ございます。具体的な内容に分けますと、106件となっております。

内容的には、カーボンマネジメントへのコメントが多く、具体的な施策のコメントが多かったです。こちらにつきましては第二版の策定で検討させていただきたいと考えております。

では、今般とりまとめました運営計画第一版の最終案について、御説明いたします。

修正ポイントの概要を御説明いたします。お手元の資料4は、修正履歴のないバージョンでございます。資料5は意見照会の時点から、どこをどう修正したかわかるように修正履歴がついたバージョンとなっております。この資料5を使って御説明させていただきます。

修正については、全般的によりわかりやすくするという観点から、細かな表現の修正を行っておりますが、本日は時間が限られておりますので、主要な修正点を御説明させていただきます。

まずは、裏表紙の目次でございます。

2-1の気候変動の括弧書きのところに、「ローカーボンマネジメント」と記載しておりましたが、本文のほうに「脱炭素化の礎」と表現しているために、「ロー」を外しまして、ここは「カーボンマネジメント」といたしました。

続いて、6ページ目の関係組織について。こちらは持続可能性の役割分担を書けないかというような議論がございました。ただ、現在、大会全体の役割分担の議論が進められている中、現時点で持続可能性の分野だけ役割分担を整理することは困難でございましたので、全体の役割分担の見直しの結果を受けて役割分担を明確にしていくと、このように記し、第二版に向けて記載いたします。

続いて、17ページの建築物の省エネルギー化の項目でございます。該当する施設がわかり

にくかったということで、具体的な施設の名前を記載いたしました。しかし、現在進められている4者協議の議論もございますので、最終的には記載内容に変更が出てくる可能性がございます。

18ページの上段のコラムは、よりわかりやすくということで、補足説明を追記しております。

続きまして、21ページのCO₂以外の温室効果ガスの対策につきましては、先月のモントリオール議定書の改正という最新の情報を追記しております。

28ページにつきましては、これまでも意識していたことではございますが、選手村や大会会場で発生することが想定される食品ロスの発生抑制、さらには、発生してしまった食品廃棄物の資源化について、こちらのほうで明確に記載いたしました。

続いて、29ページの東京都の水道水のコラムページでございますが、内容を最新の情報に更新いたしました。

最後に41ページでは、女性活躍推進法を踏まえた記載について追加をいたしました。

以上が、修正のポイントでございます。再度の説明となりますが、本日の委員会の後、組織委員会内の経営会議、それと12月13日に開催される理事会での審議を経て、12月中にIOCに提出する予定でございます。また、定量的な目標設定や具体的な施策については、持続可能性ディスカッショングループや各ワーキンググループで御議論いただきたいと思っております。

以上が「持続可能性に配慮した運営計画」の第一版案でございます。御審議のほど、よろしく願いいたします。

小宮山委員長

ありがとうございました。

ディスカッショングループ、ワーキンググループの皆様には、本当にお世話になりました。その結果出てきている案でございますが、皆様の御意見を伺いたいと思っております。

南委員代理

小西の代理の南と申します。

まず、12ページのところで、ローカーボンからカーボンマネジメントというふうに変えていただいて、プラス、脱炭素化という言葉も入れていただいております、とてもうれしく思っております。

ただ、先ほど田中さんから最後にお話があったと思っておりますが、現状では定性的な書き方のみになっておまして、今後ディスカッショングループなどで、定量的な削減目標を入れていくというお話は決まっているかと思っておりますが、ここに、例えば、「2017年度中に東京大会の温室効果ガスのカーボンフットプリントを示す。それに基づいて定量的な削減目標を暫定的に設定し、移行を精査し、更新しながら実施に向けて着実に推進する」といったような一文を追加いただければ、とてもありがたいと思っております。

もう一つだけ、21ページのCO₂以外の温室効果ガス対策の2段落目、「特に、代替フロンは」という文章の下から3行目に「ノンフロン型の機器の調達」というところがありますが、こ

れは今後、英語訳をしてIOCに提出されると思いますので、一つお願いがございます。日本において現状ノンフロンというのは、HF0も含まれていると思います。この言葉を英語に訳す際に、少し誤解が生じてしまうのではないかと懸念しておりまして、できればこの言葉を、「ノンフロン・自然冷媒型の機器」というふうな表現にさせていただくと、英語にした際に、フロンではないものを使うという意図が正確に伝わると考えております。

崎田委員

資源管理のところの一つ発言させていただきたいと思います。

28ページですが、食品ロスをかなり明記して追記いただいたことに関して、ありがとうございます。

それで、なぜこういうふう提案申し上げたかということ、世界的な課題として、地球温暖化とともに資源の効率的活用というのが大変重視されてきて、それがやはり今年度の大きな特徴でもあると思っております。

そういう中で、その具体的なものとして、食品ロスや食品廃棄について国連機関からも正式に世界に削減目標の呼びかけもありますので、このように入れていただいたことで、明確に「私たちがきちんとやるんだ」という意思を表示するという意味でも、大変大事なことだと思っております。

なお、もう一点ですが、前の御発言の方が、「定量的な目標は次回検討するということを入れてほしい」という話がありましたが、資源管理の部分も全量目標は次回に入れる話し合いをしています。一つひとつの項目に関わるのではなく、全体がそうだと思いますので、どこかこの報告書全体に関わる場所に、明確にしておいていただければありがたいと思います。

小宮山委員長

藤野委員のワーキンググループで検討して、ゼロしかないというようにしたのではないのでしょうか。

藤野委員

まだカーボンフットプリントの数値を事務局と詰めているところです。

田中持続可能性部長

目標値の今後の盛り込みについては、9ページの全体説明のところ記載しております。

小宮山委員長

わかりました。事務局は御理解されているということでよろしいですね。

吉田委員

36ページ、37ページの自然環境の再生・生物多様性の確保の辺りです。大体、今までの議論のことは盛り込まれているかとは思いますが、一つだけ私が申し上げたところで盛り込まれていないなと思うのは、「多様な生物の生息環境の再生・創出を図る」という部分で、臨海部は外来種がここから入ってくるということがかなり多いもので、そういった多様な生物の生息環境の再生・創出に当たって、外来種がそこから増えたり、それから広がったり

ということにならないように、そうした配慮というものをここに盛り込む必要があると思います。

それから、37ページの良好な景観の形成のところでは、水辺空間の緑化と、それから有機的な緑のネットワーク形成という中に入っているとは思いますが、夏に開催されるオリンピックであるということを配慮して、非常に臨海部は暑いですから、そういったことが緩和されるような形でこれを行うんだという、そういう目的が一つ入っても良いのではないかと思います。

マリ・クリスティーン委員

質問も兼ねてなんですけれども、この41ページのところに、「特に、女性や子ども」という文章を見ていると、突かれないという文章になっているような気がします。

なぜかと言いますと、例えば、女性たちがボランティアやオリンピックのこの大会に参加することは当たり前のものであって、女性たちをあえてここになんで入れているのかが理解できません。

あと、ウイメンズ・スポーツというふうに言われて、大会において女性のスポーツ・パーティシペーションということをオリンピックは言うんですけども、大会運営をしていく上では、女性がここに参加していることがもう当たり前で、あえて女性をここにに入れてしまうと、日本はまだ女性たちがそういう地位が無いように思われることがどうかと思います。

もう一つは、この中にいろんな宗教、キリスト教やイスラム教、あとは仏教、ユダヤ教と、こういうふうに1個ずつ書いていくのならば、全ての宗教というふうにまとめてしまったほうが良いと思います。食べ物に関しては、ベジタリアンとかハラールとありますけれども、ユダヤ人が食べるコーシャが入っていないので、何かいろんなものを入れてしまっているようなイメージがどうしてもあるので、英訳することも考えて、整理したほうが良いのではないかと思います。

藤野委員

10ページ、背景の4行目辺りです。2度、1.5度まで書いていただいています、やはり先ほど小宮山委員長からの御指摘もありましたが、実はこの2度、1.5度というのは、2100年までに世界全体の温室効果ガス排出量をゼロまたはマイナスを視野に大幅に削減していくということを、世界共通で共有している目標になりますので、その旨も含めて、それがあから脱炭素化を目指しているんだということをもう少し明記したほうが、目指す方向がはっきりするので、加えてはいかがかと思います。

田中委員

52ページ、前回もお願いしましたが、調査名にパラリンピックが入っていないところがございまして、中の文章にはオリンピック・パラリンピックは入っていますが、IOCからの話もあったというのは重々承知をしているんですが、やはり本大会のイメージとして、ここはやはり「オリンピック・パラリンピック」と併記していただきたいというのは、変わらずお

願い申し上げたいと思います。

小宮山委員長

ありがとうございました。既にいろいろ御意見をいただいた上でつくっていることもあって、課題は比較的少なかったように思います。事務局から、今の御意見に対して大体、反映できそうですか。

田中持続可能性部長

いただいた御意見は、事務局で検討させていただいて、委員の先生方にお返ししたいと思います。

小宮山委員長

よろしく願いいたします。

それでは、持続可能性に配慮した運営計画の第一版、これは12月13日の理事会にて承認され、IOCに提出される予定です。引き続き、来年度末に向けて第二版を策定予定ということですので、今後ともよろしく御協力をお願いしたいと思います。

では次に、東京2020参画プログラムにつきまして、事務局から御説明いただきます。

佐々木アクション&レガシー担当部長

資料6について説明いたします。

まず、東京2020大会ビジョンは三つございます。全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承、このビジョンのもとに皆様の御意見を参考にしまして、アクション&レガシープランを本年7月25日に公表いたしました。その実行のフェーズとして、東京2020参画プログラムを10月からスタートしております。

これは、スポーツのみならず、文化・芸術の分野、また、世代を超えた活動に全国の方々へに参画いただく、未来につながるプログラムということで立ち上げました。

2ページ目、参画プログラムに入るメリットですが、「つながる」というのがキーワードでございます。東京2020大会、地域、全国、未来につながるということで、それぞれの地域の方の取組を申請していただき、組織委員会が認証して、マークを使っていただくという取組でございます。

3ページ目、参画プログラムには二つのプログラムがございます。左側の公認プログラム。これは、エンブレムが使える主体の事業に対して認証させていただくプログラムでございます。右側は応援プログラムで、非営利団体の方などの事業に対して認証させていただくプログラムでございます。今後は応援プログラムの件数が増えていくことを期待しています。

両プログラムとも分野は八つに分かれて、それぞれの分野で申請していただくということになります。

マークですけれども、エンブレムが想起される、エンブレムを切り取った形のマークを策定いたしました。事業やイベントなどのアクションに対してマークをつけていただきます。

5ページ目、どういう団体が使えるのかについて記載しております。6ページ目、既に200

件強のアクション申請をいただき、認証件数は133件でございます。例えば、街づくり・持続可能性の分野では、防災に関する事業を認証しております。

次のページは文化オリンピックのアクションですが、これは10月7日のオリンピック・パラリンピックの合同パレードがございましたが、その後に行った文化オリンピックのキックオフイベントでございます。主催は東京都、組織委員会、アーツカウンシルとそれからスポンサー、約500人の方に集まっておりました。

教育プログラムでは、10月から一部の地域を対象に申請を受け付けています。4月くらいよいよ本格的に開始するというので、例えば教材の準備とか、パートナー企業と学校との連携などを始めていくといったような取組でございます。

教育プログラムの一つの例では、教育プログラムキックオフイベントということで、9月19日に1,250名の小中高生が集まり、キックオフイベントを行いました。

次のページはオリンピック価値教育プログラムです。筑波大学とともに組織委員会も研修会などを行い、オリンピックの教育プログラムを展開していく取組を行っております。

今後の広め方ですが、10月から開始し、本格始動は来年度と考えております。どんどん広げていきまして、最後、東京2020大会の前に、仮称ですけども東京2020フェスティバルを行います、こういった取組を通じてレガシーを残していきたいと考えております。

次ページ以降は具体的な認証例ということで、スポーツ・健康ですと、10月10日の体育の日に、渋谷や代々木公園でいろんなイベントを行い、NHK様でも、12時間スペシャルといった番組を放送していただきました。

次ページ、街づくり・持続可能性の分野では、「そなエリア東京」というのが臨海地域にあります、この見学会を東京商工会議所主催で実施していただきました。

持続可能性の分野では、東京湾大感謝祭2016というイベントにおいて、「WONDER ACTION CAFÉ」という環境省主催のシンポジウムを認証いたしました。子どもたちにつながるような持続可能な取組をどんどん認証していきたいと考えております。

次ページの文化では、蜷川幸雄氏の12月7日の1万人のゴールド・シアター2016を認証いたしました。

教育では、先ほどのようなオリンピック・パラリンピック教育フェスティバルといったものを9月19日に行い、認証いたしました。ここでは1,250人が、いろんな競技を実際に体験していただきました。

次ページの経済・テクノロジー分野では東京2020アイデアソンを記載しております。この目的は大会の盛り上げですけども、18歳以上の学生を対象にした公募型のアイデアソンというものを実施し、学生からアイデアをいただいて、どうやったらパラリンピックが盛り上がるかというアイデアを出し、競い合っていていただくイベントです。

最後に、小中学生からのポスター募集です。これは今までも行ってきましてけれども、継続的に取り組んでまいります。

小宮山委員長

以上の御発表に関しての御意見を伺いたいと思います。

10分ぐらい時間がございますので、どうぞ御意見をいただければと思います。少しずつ楽しくはなっているようです。

枝廣委員

早速動いているということで、うれしく思います。

基本的なことですが、四つ質問があります。一つは、現在もう200件ぐらい申請があったということですが、現在それから来年度に向けての告知・周知の方法について教えてください。

2点目は、NGOなどが申請をしたいと思ったときの申請方法について教えてください。

3点目は、前回私が発言した中で、実際に認証したプログラムをWebで蓄積していき、見える化をすることを提案しましたが、その辺りの進捗について教えてください。

4点目、最後の質問ですが、申請して認証されたプログラムは、単にマークが使えるだけなのか。それとも例えば、そのマークを使った結果どうだったか、コメントとかフィードバックなど、オリンピック・パラリンピックに紐づけての何かコメントなどを事務局で集めるのでしょうか。マークをつけるだけの場合と、もう一步踏み込んで関与する場合は、大分違うと思います。この4点について教えてください。

崎田委員

ほぼ同じ視点の質問ですが、NGOの方にこういう応援プログラムができたんだというお話をしても、知っている方がやはりまだとても少ないということで、多くの方に自分たちが工夫をして参加をするという形ができることを伝え、参加が広がることを望んでいます。

小宮山委員長

今の御意見は、本当に重要なポイントです。21世紀の社会を見せるということと、もう一つ皆様が言い続けたのは、途上国における、中央政府が引っ張るだけのオリンピックではなく、参加型のオリンピックにしなくてはだめだということです。皆様がずっとおっしゃっている非常に重要なポイントですので、後でお答えください。

マリ・クリスティーン委員

いろいろな方に参加していただけることが重要だと思います。

たまたま一昨日、1964年にJNTOが立ち上げたSGG、グッドウィル・ガイドの皆様方の集まりが東京でありまして、講演させていただいたのですが、やはり英語でボランティアしたい、いろんな国の言葉でボランティアしたいという方が多い中で、それこそ東京都の小学校がオリンピック案内をできるような英会話クラスを学校の中でカリキュラムの中に入れていただくことや、そういう学校を認証してさしあげれば、子どもたちもマークをつけて動けると思います。私はこうやって2020年のために頑張っ英会話を勉強しようとしていますとか、中国語を勉強していますとか何でもいいですから、そういうことで自分たちがこうやって参加するんだということを、このプログラムに入れていただけると、皆様、喜ぶのではないかと思いますので、何かそういうことも考えていただけたらいいなと思います。

藤野委員

先週マラケシュCOPに行ってきましたが、例えばジャパンパビリオンで、Climate Youth Japanというグループが、東京オリンピックを考えるというサイドイベントを行っていました。そこでは中東の若者や、フランス人、アジアの若者たちが日本のオリンピックを、2020年を想像しながら、どういう方向を目指していけばいいのかというようなディスカッションも行われていましたので、そういうのもプログラムに入れていければ、彼らはまた活動すると思います。

その際、やっぱり応援プログラムもいいんですけども、できるだけ公認プログラムにしていくにはどうしたらいいのか。例えば、組織委員会と一緒にやるとかなり公認プログラムになっていくとは思いますが、そういったところの緩和条件なのか、容認条件みたいなところについて、もう一度整理していただきたいと思います。やはり若い人の活動、またはアジアとか世界の若者がやりたいというところに、日本語の情報だけでなく英語やそれぞれの言語の情報までもいづれ必要になってくると思うんですけども、そうした体制について、どういう検討状況か、またはどういうことができるかというのを、検討していただけたらと思います。

小宮山委員長

大変重要な視点だと思います。今だと右側の枠（東京2020応援プログラム）は、例えばベンチャー企業は参加できないわけですね。そういうところには非常に力がある場合がありますので、緩和条項といったもので参加を可能とするというのは、活性化にとって非常に重要だと思います。

吉田委員

2020年という年がオリンピックとして重要なだけではなくて、環境問題としても非常に重要な年で、皆様御存じのとおり、生物多様性であれば2020年というものが一つの目標期間になって、その次の2030年の目標を考えなくてははいけないし、それから、もちろんパリ協定などについても2020年から先というものは非常に重要になりますし、SDGについても2020年、2030年の目標を決めていないところはそこでやっていくということで、非常に重要な期間です。私も今、IUCN日本委員会というところで、いろいろな環境団体も入って、2020年をどういう年にすべきかということを考えています。

9月に、今年はハワイで世界自然保護会議という4年に1度の会議がありまして、これはかなり大きな会議で、オバマ大統領も開会式には参加できなかったんですけども、世界で一番広い海洋保護区をつくるというような発表が行われています。ただ、オリンピックのある年にそういう大きな、1万人規模のイベントを別途やるというのはなかなか大変でしょうけれども、その年には、世界自然保護会議もまた4年後ということで開かれますし、それから生物多様性の条約の会議も開かれる年でもあるし、いろいろな面で2020年は重要な年なので、オリンピックの中でも、あるいは前後で、世界の環境会議と関連したイベントで環境を考えていけるようなことがこの関連のプログラムとしてやれるといいと思います。

間野委員

この参加対象ですが、大学生とか若者の任意団体がもう少し参加できるようにできないでしょうか。

先月行われたスポーツ・文化・ワールド・フォーラムも素晴らしかったのですが、やはり若い人が少ないと感じます。キャパシティの問題があったと思いますが、2020年以降の世をつくっていく人たちが、この2020年大会を自分たちの成功体験としてやる。大人がつくった道を引かれて行くのではなく、自分たちも参加して、この大会をつくって、盛り上げて、自分たちがそれを引き継いでいくというのが大切かと思います。その意味では、先日、大学連携プログラムにうちの学生も参加し、とても感動して帰ってきて、ようやく自分たちが何かできそうだと。そんなのも是非応援プログラムの付与対象にしていただければと思います。

小宮山委員長

ありがとうございます。

皆さんの御意見には、具体的には環境関係のさまざまな大きなイベントと連携するといった具体的なお話もございました。最初の枝廣委員の御質問、どうやって申し込むのかということ、大学生のように対象になっていないところや、私が申し上げた、ベンチャー企業だが非常に新しいことをやろうとしているところなど、そういう広い参加をどうやって募集していくのかという点を教えてください。まず、枝廣委員の四つの質問についてお願いします。

佐々木アクション&レガシー担当部長

まず一つ目は告知ですが、パンフレットをようやく作りましたので、これを様々なところに御説明に行き、周知に使っていただくということに取り組んでおります。実際に参画プログラムということがまだ全然広まっていませんので、今、広めているところです。

次に、NGOや大学の申請開始については、来年度中に対象とするということで考えております。

小宮山委員長

途中で悪いのですが、このパンフレットを見て、申し込みたい人はどうすればいいと思いますか。

佐々木アクション&レガシー担当部長

Webで参画プログラムを検索していただくと、実際にどういう団体が申し込めるのかということについてリンクがあります。こちらのほうで申し込みいただけます。

小宮山委員長

パンフレットの中に、どういう団体が申し込めて、どうやって申し込むのかということが書いてあったほうがいいですね。

佐々木アクション&レガシー担当部長

わかりました。検討させていただきます。

小宮山委員長

要するに、申請する側としては申請方法がどこに書かれているのか。ユーザーの立場に立って、自分が知らなかったときに申請できるのかどうか。その情報がほとんどありません。ですから、ホームページをつくる人はいるけれども、見て、入ってくる人というのはいない。これは大変に重要なポイントです。

佐々木アクション&レガシー担当部長

ありがとうございます。具体的にはこれから考えたいと思います。それから、四つの質問のうちの三つ目は、認証されたものは実際にどこに出ているのかということですが、既に組織委員会のホームページ上にプログラムの実績ということで掲載しています。

小宮山委員長

ホームページには書いてあるのに、何がいけないのかということですね。枝廣委員にアイデアがおありなのかどうかですね。

佐々木アクション&レガシー担当部長

組織委員会のホームページ自体が皆様にあまり見られていないということは問題かもしれません。四つ目は、申請した場合にマークの使用だけかということですが、公認プログラムでは、事業やイベントのタイトルに「オリンピック・パラリンピック」という文言が使えます。応援プログラムでは、説明文に使えます。

「オリンピック・パラリンピック」というのは、IOCやIPCの知的財産権になっていまして、組織委員会が管理する義務があり、厳格なルールがあります。マークだけではなくて、公認プログラムの場合はタイトルに、応援プログラムの場合は説明文に「オリンピック・パラリンピック」という言葉が使えるということで東京2020大会とのつながりを感じてもらえればと思います。

小宮山委員長

それでは、今の目標は、できるだけ広い層からの参加が可能になるようにするという話ですが、今のお答えでいいですか。どうしたらいいか、お知恵があったらおっしゃってください。告知の仕方とか、勧誘の仕方とか、あるいは学生は本当に重要ですよ。そういう人たちが参加しようと思ったときに、どこに、何が書いてあったらいいんでしょうか。

マリ・クリスティーヌ委員

英語でも書いていないですよ。外国人で日本に住んでいる方も参加できるようになっていないですね。

小宮山委員長

言語の問題もありますね。何かお知恵ありますか。

間野委員

スマホ時代なので、専用のアプリみたいなものをつくってもらおうとか。多分、学生たちはもうほとんどSNSでつながっています。どれぐらいお金がかかるのかわかりませんが、簡便で済むのであれば、そんな方法もあるかもしれません。

枝廣委員

例えば、このプログラムを立ち上げて、それぞれ声をかけたりしてある程度申請を募っていくというやり方と、そこに参加したいという自立的な広がりをつくり出すというのでは、多分、やり方が違うと思います。できたら、ひとりで広がっていくような、そういう仕組みを今のうちからつくってほしいなと思っています。

そのときのキーワードは、小宮山先生がおっしゃっているように、わかりやすさということかと思います。つまりWebで探さないといけない、組織委員会の中でもどこにあるかわからない、そういうものではやはりハードルが高いので、わかりやすさ、使いやすさということと、わくわくするものかどうかというのがとても大事だと思います。

予算などはわからない前提で言いますが、組織委員会のホームページ上に公認、もしくは応援プログラムを出すのではなくて、その紐づけでいいので、そのための別サイトをつくる。例えば、全面に日本地図か世界地図があってそこで示していく。昔「100万人のキャンドルナイト」でやったのですが、キャンドルナイトに参加表明するたびに、表明する人が郵便番号を入れるんです。そうすると、その表明した人の郵便番号から地図上にロウソクの明かりがともると。次はじゃあ、こちらの人の明かりがともって、日本中にその明かりが次々ともっていく様子から、日本中で参加しているんだ、だったら私も参加しよう、そういう広がりをつくったんです。

ですので、例えば日本地図上にどんどん参加する団体のいろいろな、ロゴでもいいし、旗でもいいし、それが広がって行って、それ自体を見ていてわくわくする、じゃあ自分も参加しよう、もしくは、自分の県は全然ないから、県のほうでも声をかけようとか。そういう形でやってほしいと思います。

アイデアはいろいろあるので、また御相談いただければと思いますが、わかりやすく、参加しやすいかということと、わくわく感をどうつくり出すかが重要だと思います。

中村企画財務局長

ありがとうございます。今の枝廣先生のお話は非常にありがたいお話です。我々も件数の数値目標を掲げようかという話もありましたが、それはあまり意味がないですね。まず最初は、全都道府県で、一つでもイベントをすることをまず目標に掲げていますが、まだ、実は20に至っていません。

年度内に例えば、各都道府県名をクリックすると、その各県において、北部、南部、中部とか、どういう広がりがあるかとか、ビジュアル的に広がりがわかるような形であるとか、あるいは年度計画があるとするとか、その県で来週こういうのがあるとか、1カ月後にこういうのがあるとか、参画する、企画を行う方だけじゃなくて、どこで、どういうイベントをやっていて、そこに我々が連携できるのか、そういうのも是非わかりやすい形で作っていきなさいと思っていますので、また、いろいろアイデアをいただければと思います。

小宮山委員長

いかにしてみんなに広報を行い、引っ張っていくかについては、私も含めて不得意なところなんです。そのことをよく意識されて、どういう人たちと一緒に連携したらいいかをお考えに

なるのが良いと思います。

一つは若者、それから女性がこういうことは得意だと思いますだから、そういう人たちの助力を得てやることをお考えください。

それでは、次は国民参画による入賞メダル制作についてです。11月9日に開催された理事会で報告されていますが、組織委員会の方向性について事務局から御説明ください。

中村企画財務局長

こちらは、まさにこの街づくり・持続可能性委員会で取り上げられたものですし、今日、第一のテーマがサステナビリティ、第二のテーマが国民参画ということで、その二つを組み合わせたプロジェクトを抽象論ではなくて、具体的に形にしたいという一つの取組でございます。

まず、「別紙」と書いていますが、冒頭、小宮山委員長からお話がありましたけれども、そもそもの出発点ということで、いま一度、都市鉱山について説明をいたします。

まず最初に、都市鉱山の現状ですが、右側のグラフのとおり、地上資源と地下資源。地上資源というのは既に採掘されて、既に地上にあるもの。採掘というのは、まだ地下に眠っているもの、その割合をグラフ化しておりますけれども、大体、金銀についてはもう地上に7割が採掘されており、埋まっているのは3割にすぎないということで、都市鉱山と言われる地上資源の需要は非常に高まっているということでございます。

また、密度につきましても、この下の表のとおり、携帯電話の金銀の含有率というのは鉱山の含有率に比べて、金は約68倍、銀は5~6倍と非常に含有率が高いということもあり、より効率的に採掘ができるということで、都市鉱山の活用への動きは、現在、世界的に広がりを見せております。

昨年12月にこちらの委員会でも報告がございましたけれども、サステナブルディベロップメントゴールズ、SDGsが採択されまして、また、今年の伊勢志摩サミットの首脳宣言や、富山で開催された環境大臣会議では「富山物質循環フレームワーク」、これは天然資源の消費をなるべく抑制するとともに再利用を図っていくというものが採択されるなど、資源の管理に関して世界的な関心が高まっているという背景もございます。

一方、足元、国内の状況を見ますと、平成25年に小型家電リサイクル法が制定されるなど、法整備もされておりますけれども、他方で携帯電話を例に挙げますと、携帯電話でリサイクルされている割合は2割ということで、一部は電話として再利用されているのかもしれませんが、残りはかなりの割合が机とか引き出しの中で埋まっているということがあります。

これから御説明します本プロジェクトが実際に動き出せば、国内に眠っている有用な資源のリサイクルが一層進むのではないかと、それがムーブメントとして根づけば、レガシーとなるのではないかという思いが、根底にございます。

続きまして、資料7、これは先週の理事会で御説明し、了承を得られ、その後、対外的にも公表したものでございます。

理事会でも、この取組は街づくり・持続可能性委員会での意見がスタートになったという

ところから御説明をいたしました。不要になった携帯電話をはじめとした小型家電等から抽出されるリサイクル金属を活用して入賞メダルを制作することで、持続可能性に配慮した大会ということ、まずメッセージとして伝えることができるんじゃないかと思います。加えて、大会への参画というのが具体的な姿になるのではないかということでございます。

先ほど御審議いただいた持続可能な運営計画の中にも一部盛り込まれておりますけれども、組織委員会としての方向性として、大会エンゲージメント、持続可能性への配慮、レガシーの観点から、国民が保有する携帯電話をはじめとした小型家電の回収処理をすることで、抽出されたリサイクル金属を活用してメダル制作をしたいということを理事会で報告し、方向性として了承いただきました。

実際にこのプロジェクトを推進するに当たってのポイントを幾つか、下のページで整理しております。

三つの観点がございます、一つは国民参加の観点であります。

東京や特定の地域だけではなくて、日本全国で参画できるような、そういう活動にしたいと思っております。

また、オリンピック・パラリンピックとの結びつきであるとか、東京2020大会に向けた取組であることをきちんと認識してもらって、国民の皆様の参画意識と結びつくようなプロジェクトにしたいと思っております。

また、参画していただく方々に、このプロジェクトの内容、趣旨を正しく理解していただくために、各地できめ細かくPRや説明を行っていきたいと思っております。

リサイクルの観点からは、これがかけ声だけではなくて、真にリサイクルを踏まえたメダルであることを確認できるような、トレーサビリティをどう確保していくかという観点がございます。

実際に国民の皆様に参加していただくことで、エコ意識の向上につながるものになりたいと思っておりますし、可能であれば、1回限りの取組ではなくて、2020年以降も何らかの形で継続的に行われるようなことができればというふうに考えております。

三つ目は、まさに実務的な観点でございますが、実際にメダルをつくるとなると、やはりメダル製造に必要な量の原材料が必要な時期までに供給される必要がございます。

また、ばらばらに持ってきていただくと、なかなかそれを一緒にするのは難しいため、一定規模以上の素材の回収・処理・精錬・納品まで責任持って一括で管理できるような、そして、その原材料となる金属を塊の形で供給していただけるような形が望ましいと考えております。

当然、コストの問題は重要でございますので、回収から精錬まで、メダル制作の費用を可能な限り抑える必要があるというふうに我々は考えているところでございます。

こういふことで、この委員会が発案となって進めるプロジェクトでございますので、いま一度、特に国民参画の観点であるとか、リサイクルの観点であるとか、そういったところについて御意見をいただければありがたく思います。

崎田委員

私は、まず3点、お話をしたいと思ったんですが、1点目は、このプロジェクトを決心していただいて、よかったと思います。やはり、実際にはメダルになる金属を事業者から一括して購入して作成したほうが手間はかからないと思いますけれども、こういうような仕組みで、しっかりと考えていただいたということは非常にありがたいことだと思っております。

この委員会での意見だけではなく、アクション&レガシープランの意見募集のところにも出てきました。例えば、東北3市があわせて提案していきたり、事業者の店頭回収をやっている団体が提案をしていることを表明したり、関心の高まる雰囲気が社会にも出てきておりましたので、やはりこういう時期に決心していただいて、多くの国民が参画することと回収資源を効率よく活用する持続可能性意識の向上ということで、ありがたいと思っております。

2点目の意見は、そういう意味で、この資料7の一番上を見ていると、今日は都市鉱山の別紙を出していただきましたが、プロジェクトのタイトルにも「都市鉱山」と入れていただき、広げていただいたほうがわかりやすいという気もします。

まだ「(仮称)」と書いてありますので、例えばなんですが、「国民参加による入賞メダル制作について みんなでつくる都市鉱山メダルプロジェクト」とか、何かもう一工夫あってもよろしいかという印象も持ちました。

3点目は、質問にもなりますが、最後にこのプロジェクトを推進するパートナーを選定するための企画提案を受け付けると書いてあります。これをどのようなタイムスケジュールで考えておられるのかというのを、伺いたいと思います。

トレーサビリティ確保とか、回収・処理・精錬・納品まで一括して責任を持つとか、全国に呼びかけて回収するなど、かなりきちんと準備をして、大きなプロジェクトにしていかないといけないと思っております。

1社だけというよりは、専門の企業が連携をして提案するとか、そういう盛り上がりがある社会の中に起こっていく必要があるんじゃないかと思っておりますので。この企画提案をどういう流れで受け付けて、どういうふうに具体化していくのかというタイムスケジュールなどを、明確にさせていただくほうが、社会もそれを受け止めやすいのではないかと思います。

藤野委員

メダルをもらった人が誇らしくなることが大事ではないかと思えます。趣旨がわからなくて、なんで、そんな都市鉱山でつくったメダルをもらわなければいけないのかといった発言がもしアスリートから出てしまったら、この企画は台無しになるのではということをおそれています。

普通につくるメダルと全く同等の品質であるし、これは循環型社会の礎というような、人工物の飽和とか、鉱物の飽和というこれから向かう方向の中で、資源をつくり出していくとか、再活用していくというのが次の時代のトレンドなんだという象徴としてのメダルであるというようなメッセージをきちんとつくりたいいけない。一方で、参加した人も、

アスリートがそういうことを言ってしまうと、せっかく参画したのに喜ばれないという非常に寂しいことになるのではないかと思います。その辺の哲学というか、どういうメッセージをきちんと伝えるかが大切だと思います。

アスリートの人たちが誤解なく、1位になって、この金メダルを持ってうれしいと思ってくれるように、しっかりとフィロソフィーとしてのメッセージを伝えておかないと、何か変な一言で残念にならないようにということだけを危惧します。

枝廣委員

2点あります。それぞれお二人が言われたことと重なるのですが、小宮山先生がおっしゃっているように、先進国型のオリンピックの象徴的なものになると思っています。

この都市鉱山でつくったオリンピックのメダルというのが、どういう価値があって、今後に向けての大きな転換点になるということをほかの国にもきちんとわかっているように、その理解があってこそ、アスリートももらってうれしいと思います。

多分、日本のような理解をしている国はたくさん無いので、パリ協定の前にフランスが1年前から根回しをしていたように、その辺りは何重にも手を尽くしていただきたいというのが1点です。

もう1点は、これは目玉になりますから、国内の事業者にとっても非常にアピールできるし、クレジットになりますよね。理事会の発表があつてすぐにNTTもやるぞと手を挙げていました。きっと多くの団体も参加表明すると思うのですね。

そのときに、どこかだけを選定してやるのではなくて、協議会方式のような形でできればと思います。それぞれ、携帯が強いところもあるし、国民への周知が得意なところもあるし、もともとリサイクルをやってきた団体もある。少し手間がかかるかもわかりませんが、どこか一つ選んで、それで任せたよというよりも、国民参加型にするための企画提案も含めて、みんな一緒に参加できるようにしていただければと思います。

パートナーをすぐ選んでそこに任せるという前に、協議会をつくるなりして丁寧にやらないと、結局どこかのプロジェクトだねとなってしまう、あまり国民参加型にならない。そういう意味で国内外で丁寧に進めていただくことをお願いします。

マリ・クリスティーヌ委員

エンブレムのときもそうだったんですけども、なるべく親子で参加できるということがすごく大事だと思います。アメリカで、例えば糖尿病で自分でインスリンを打たなければいけない方というのは、針が残るんですね。その持って行き場所というのは消防署なんです。そして、ファイアーメンたちが受け取って処理してくれます。

日本の消防団の方々が90万人も日本にいるということで、非常に多くの消防団員、そして消防署員もいるので、地域の方々が家族で、土日に認証イベントとして消防団の方々に渡しに行く。消防団の方々もオリンピックのときにはかなり活動していただかないといけないので、うまく手と手を取り合った形でのプログラムができれば、本当の地域参加型になるかと思っています。

是非、ほかの省庁も活用できるんじゃないかなと思います。

中村企画財務局長

御意見、ありがとうございました。ちょうど先週、理事会でこれを我々が発表したまさにその日ですが、スイスのローザンヌにあるIOCのバッハ会長からコメントがリリースされました。

和訳のほうを読ませていただくと、「これらのメダルは、2020年大会のオリンピックチャンピオンにとって、彼らの功績を永遠に称えるものになります。また、このメダルがオリンピックアジェンダ2020の趣旨に沿って、持続可能性に関する強いメッセージを世界に向けて届けることになることは、とても良いことです。」ということで、アスリートにもこれからこのプロジェクトの意味を我々からきちんと説明してまいります。

小宮山委員長

それは大変重要なことで、いいことだと思います。ただ、それを本当に名誉あるものにするのは、藤野委員、枝廣委員らのおっしゃったことをしっかりとやることが重要だと思います。

中村企画財務局長

わかりました。

あと一つ、都市鉱山とか、大きな理念の中の一つのステップとして、やはり抽象的ではだめで、物事を具体的に動かすのは非常に大事だと思っています。このプロジェクトは是非進めたいと思っております。枝廣委員の御意見とも関連しますが、今後のスケジュールについて申し上げますと、今年の春ぐらいから回収を始めないとなかなか難しいと思っています。

今日いただいた御意見も参考にして、丁寧に進めていく必要があります。まずは明日か明後日かに、どういう形でそのアイデアを募集するかということオープンにし、月内辺りを目処にまずは参画表明をいただきまして、その後、きちんとプロポーザルを受け付ける機会を設けます。その上で、年明けに、パートナーを決める必要があると思っています。

先ほど申し上げた国民参画の観点からどうするのか、リサイクルの観点からどうするのかというのは、やはり抽象論ではだめで、そのパートナーの方と何ができるか、できないかということを中心にきちんと相談して、具体論にして、来年春以降しっかりと詰めていきたいと思っておりますし、また、具体的な計画が固まりましたら、この委員会に報告させていただきたいと考えております。

小宮山委員長

今、スマホは集まりさえすれば、市場で取引されています。ですから、品質にも全く問題はないし、コストも余計にかかるということはありません。

結局どうやって集めるかということですが、今おっしゃったことでいいと思いますが、ここには知恵が必要で、二点あります。

一つは、どのように個人情報の管理を確実に行うか。また手間がかかりすぎてもいけません。このような個人情報の管理が極めて重要なポイントになります。もう一つは、スマホな

どを持っていく方の手間をどのように解消するかです。この知恵を持っている、一生懸命やっているベンチャーは幾つかあります。

中村企画財務局長

具体的なところは我々がしっかりと進めて参ります。どういうビジョンや理念を持つべきかという点をこれからも御指導いただければと思います。

小宮山委員長

いろいろと御経験のある方もいらっしゃるので、理念と具体論と、両方、是非お願いいたします。

それでは、最後に事務局から事務連絡等をお願いいたします。

佐々木アクション&レガシー担当部長

どうもありがとうございました。

入賞メダルについては、今の御意見を踏まえ取り組んでいきます。

次回の委員会は2月下旬を予定しておりまして、議題は、調達コードと入賞メダルの制作の進捗状況及び参画プログラムの進捗等について予定しております。開催日時に関しましては、また調整の上お伝えします。

小宮山委員長

具体論が出てくるとおもしろくなってきて、大変、張り合いがございました。それでは、是非、今後とも皆様、よろしく御協力いただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

以上